

10 銀閣寺(慈照寺)

ぎんかくじ(じしよつじ)

知る

銀閣寺とは

銀閣寺は正式には東山慈照寺とうざんじしよつじといい、臨濟宗相国寺派しんじゆしゆくじに属する寺院で、左京区銀閣寺町ぎんかくじにあります。

当寺は室町幕府八代將軍足利義政あしかがよしまさ(一四三六〜九〇)が造立ひがしやまどのした東山殿全体を指しています。この東山殿内に建てられた

二層楼閣(観音殿かんのんでん)を銀閣と称し、それが寺全体の象徴的な建物となつたことから、慈照寺は銀閣寺と通称されるようになりました。

創建当初、この観音殿には実際に銀箔を貼る計画があつたともいわれますが、創建者の義政が建設途中に没したため、詳しいことはわかっていません。

結果的に銀箔は貼られなかつたものの、やがて江戸時代以降にな

ると、室町幕府三代將軍足利義満あしかがよしみつ(一三五八〜一四〇八)の建てた鹿苑寺の金閣(舍利殿せりでん)に対して、慈照寺の観音殿は銀閣と呼ばれるようになり、さらには寺そのものも銀閣寺と称されるにいたつたのです。

銀閣寺の建つこの地は、本来、平安時代中頃から天台宗の名刹浄土寺じよつどじがあつたところでした。しかし室町時代に起こつた応仁・文明の乱(一四六七〜七七)のために浄土寺は焼失し、さらに義政がこの地を好んだことから、文明十四(一四八二年)、義政は寺跡に宿望の山荘(東山殿)造営を行い、翌十五年に移り住みました。

義政は庭園を中心とした山荘を建てることを意図し、自身起居する常御所つねのみしろをはじめ、西指庵せいしあん(禅室)・起然亭きぜんてい・東求堂とうくどう(持仏堂)・会所かいしよ・泉殿など多くの殿堂や楼閣を東山殿内に設けました。そして、さらに観音殿(銀閣)の造営を開始しましたが、延徳二(一四九〇)年正月、義政はその完成を見ることなく六十五年の生涯を閉じることになりました。その間、東山殿を中心として東山文化が開花したことはあまりにも有名です。

義政没後の銀閣寺

義政の没後、東山殿は遺命にしたがつて禅寺に改められ、義政の法号慈照院喜山道慶にちなんで慈照院と命名されました。ついで延徳三(一四九一)年三月には名目上の開山として禅僧夢窓疎石むそうそせき(故人)を招き、慈照寺と改められました。



銀閣と錦鏡池

その後、足利將軍家の衰退とともに寺運は衰えていきますが、それに追い打ちをかけたのが、天文十九(一五五〇)年十一月、三好長慶と十三代將軍足利義輝とが当地附近で戦った天文の兵火でした。

江戸時代に入ると、銀閣寺は徳川家康より三十五石の寺領を与えられ、方丈・観音殿(銀閣)・東求堂・西指庵などの建設や修理を行い、荒廃していた庭園の修築にもつとめました。現在の庭園も、大半がこのときに修築されたものです。

また明治時代には、廃仏毀釈の影響を受けて一時逼迫しましたが、住持の努力によって東求堂・方丈・観音殿などを修理しました。また東求堂の北側に義政時代の遺構弄清亭を再興し、さらに庭園にも手を加えて、見事に復興をとげました。

歩く/見る

銀閣

池の西北角にある観音殿で、東山殿内で最後に建てられ、また創建当初からの遺構を現在に伝える建物です。宝形造、こけら葺の二重の楼閣で、屋根には鳳凰が飾られています。金閣と同様、このような楼閣建築を邸内につくるのは足利將軍邸のしきたりだったと考えられています。

一階は心空殿と呼ばれる書院造、二階は潮音閣と呼ばれる禅宗様(唐様)で観音像が安置されています。

江戸時代に数度改修され、大正二(一九一三)年には大規模な解体修理が行われました。そして、昭和二十六年六月、戦後最初の国宝指定時に、銀閣は国宝に指定されました。なお平成六年には、銀閣寺は世界文化遺産に登録されています。

庭園

北・東・南の三方を山に囲まれたこの庭園は、義政が数多く築造した庭園のなかで唯一、現在に残されている遺構です。義政が最も好んでいた西芳寺(苔寺)庭園を模倣してつくられ、彼が東山殿に移住した後、みずから指揮して、さまざまな場所から植木や庭石を移植させ、作庭したといえます。

この庭園は、本来、現在の庭園より一段高い場所にあったと推定される漱鮮亭跡(昭和六年に発掘)の庭と、現在の境内中心部の庭からなる上下二段の形式を取っています。漱鮮亭跡の庭の石組・泉・水流の跡をはじめ、東求堂正面の白鶴島や仙桂橋・仙袖橋などは義政創建当初の様子を残しているといわれています。

一方、東求堂正面の座禅石・大内石をはじめ、銀閣正面の

池泉(錦鏡池)周辺、すなわち境内の庭園の大半は、江戸時代の元和元(一六一五)年・寛永十六(一六三九)年に修復されたものです。

また、中国の西湖の風景を模倣したといわれる本堂(方丈)前の向月台と銀沙灘は、安土桃山時代頃までには既につくら



銀沙灘・向月台と銀閣
手前に広がるのが銀沙灘，銀閣の前に盛られているのが向月台です。

れていたともいわれますが、江戸時代の修復の際、さらに拡大してつくり替えられたようです。この向月台は東山に昇る月をこの上に座って待ったといい、また銀沙灘は月の光を反射させるためにつくられたといわれています。

現在、この庭園は国の特別史跡・特別名勝に指定されています。

方丈(本堂)

慈照寺の本堂となる建物で、江戸時代初期、寛永年間(一六二四〜四四)の建築といわれています。本尊釈迦牟尼仏を安置します。また、内部には江戸時代の俳人・画家与謝蕪村(一七一六〜八三)と画家池大雅(一七二三〜七六)の共作による襖絵があり、これは平成四年、京都市指定文化財となっています。

東求堂

東山殿創建当初から存在した義政の持仏堂で、元々は阿弥

陀三尊を本尊とした阿弥陀堂でした。造りは一重の入母屋造、屋根は松皮葺で、昭和三十九〜四十年の修理以前はこけら葺でした。



現在、東求堂は方丈の東に位置してありますが、創建当初は銀閣(観音殿)の近くにあり、後に現在地へそのままの形で移動されたと考えられています。堂内には義政像が安置され、南には仏間、東北隅には義政の書斎である同仁齋があります。

同仁齋は、四畳半で、机の役割を担う一間の付書院と物を収納する半間の違棚が北側に設けられています。住宅遺構として最も古く、書院造が完成する以前の状態を示すものとして貴重な建物です。

この東求堂は昭和二十六年六月、戦後最初の国宝指定時に国宝として指定され、同三十九年に解体修理が行われました。また、東求堂と本堂の間には、四方の側面に市松模様が彫られた銀閣寺型(袈裟型)手水鉢が置かれています。

義政の墓と香火所 上京区相国寺門前町

室町時代、相国寺の塔頭が足利家歴代將軍の位牌所であったことから、義政の墓は現在、相国寺惣墓地にあり、焼香を行うための場所である香火所も塔頭慈照院にあります。

義政死去の後、その遺骨は相国寺内の別の塔頭であった大智院に安置されていました。しかし、義政の香火所をつとめる寺は院名を慈照院と変更しなければならなかったため、大



足利義政墓

智院の反対にありました。その結果、別の塔頭である大徳院が彼の香火所として慈照院と名を改め、遺骨もそこに移されて現在にいます。



銀閣寺境内図